

## 行為・制度・基盤—自明性の裂け目と私の存在をめぐる—

牧野篤<sup>†</sup>

<sup>†</sup> 東京大学大学院教育学研究科

生涯学習基盤経営コースのオープンラボで開催されたパネルディスカッション「生涯学習を支える基盤とは何か」(2009 年 6 月 13 日)における議論を受けて、コースの教員として、生涯学習基盤経営という言葉をめぐる所感を記す。生涯学習とは、言語のもつ事前的な制約がもたらす事後性と過剰な達成によって、行為としての制度の自明性を解体しながら、制度を生成的に生み出して社会を構成する私という存在を、一生涯にわたって立ち上げることである。生涯学習基盤経営とは、端的に、そのための形式をつくりだすことを一身に担う大学の役割を問うということである。

キーワード：生涯学習，行為，制度，社会，基盤，言語

学習はきわめて個人的な行為でありながら、またきわめて社会的な行為でもある。たとえば、デューイは、学習とは問題状況を問題解決状況へと組み換える行為であり、その結果もたらされるのが知識であるとして、知識を得ようとする人間の意思を問うた。王陽明は「格物致知」つまりある存在と自ら関わることで知を得ることが学習であるとして、人間の主導性を重視し、王陽明思想をもとにデューイを受容した陶行知は「行は知の始まり」、つまり人間そのものは環境と矛盾を生じざるを得ない存在であり、その矛盾を感受するところから知を得る行為へと向かう、それが学習だという。ここには当然、人間自らが社会的な存在として、問題状況に置かれるのか、それとも問題状況を作り出すのかという知を得る行為に関する初発の契機として受動・能動の違いがある。しかし、それはさほど重要ではない。問われるべきは、その問題状況を感受するという受動的でありかつ能動的である行為のありようである。それは、端的には世界の自明性が崩れることで、自らの自明性に裂け目が訪れ、その裂け目を閉じるためにこそ行為としての知ることが生まれ、その結果、知識が得られるということである。

しかし、知識を得ることで人は世界の自明性と自らの自明性を回復するわけではない。知識を得ることで人は世界の自明性を我がものとしようとするが、それはその実、次の裂け目を引き起こさざるを得ない。世界の自明性が崩れ、自己の自明性に裂け目が開かれるとき、人はすでに自己と

世界との関係態として自己を認識している。そのため、その人が世界と自己の自明性を回復しようとする営み、つまり知するという行為は、知らないと不安であるという自己と世界との関係のあり方を、知って安心するという関係のあり方へと組み換えつつ、常に自己を対象化する自分を立ち上げざるを得ない。世界との関係態である自分は、常にその関係から自分を疎外することでしか、関係態として存在し、認識され得ない。その結果、自分は常に世界との間でズレを生じながら、そのズレを解消しようとして、次の自分へと自分をつくりだしていく他はない。裂け目は縫い合わされる端から、次の裂け目へと口を開いていく。その結果、私は私である端から私ではない私へと移ろっていく。その私をとらえるためにこそ、人は知ろうとし続けなければならない。

そして、ここには制度が関わっている。制度化された世界である。それは、人にその世界の中に自足することを、つまりその世界を自明のものとして受け入れ、自分を自明のものとして、考えるまでもないものとして存在させることを求める。この制度の最たるものが言語である。言語をもつことで、世界は社会となる。世界は言語によって切り取られ、意味化され、社会へと構成される。社会はトートロジックな意味をもち、人は社会的存在として社会に自足することになる。野蛮は文明ではないが故に野蛮であり、文明は野蛮ではないが故に文明である。彼は私ではないが故に彼であり、私は彼ではないが故に私である。私は私と

してトートロジックに存在し続けることができる。なぜなら、私は他の誰でもない私なのだから。

ところが、ここに罣がしかけられる。私が私を認識する言語は私のものではなく、そのように認識する私は私である必要はない。私は社会のものである言語を使うことでしか私であることをいえず、私が私であることの自明性は他の誰かの自明性が自明であることによってしか保たれないのに、他者の自明性は私の自明性によってしか支えられない。であるのに、私の自明性=他者の自明性は言語によって解体していつてしまう。私が私を認識する言語は誰か他の人のものであり、私が私であることの自明性はない。ここに自明性の裂け目が口を開ける。制度としての社会は、言語によって制度化されながら、言語がその社会の制度であることによって自明性が解体され、私自身の存在の自明性も曖昧となる。

だが、この制度としての言語によってこそ、私は私であり得る。制度化された言語によってこそ、私は私の中に私が生きる社会が息づいていることを認識することができ、私をその言葉を使う人々に対して限定的に名宛てすることができる。私の言語表現は、その言語によって言及できるものを言及できる仕方ではしか言及しないような形で展開する他はなく、この事前性=限定が、言語の介在によって、私と他者の存在との間にコミュニケーションを成立させる。そうだからこそ、私は常に他者へと解消されざるを得ない危機を抱え込みながら、自分を他者へと名宛てして、自分を他者から同定されることを求めざるを得ない。私は、ここで、事後的に自分を獲得するのだ。自明性の裂け目を埋める形で、事後的に私にもたらされるもの、それが社会的な自己認識である。

そう、ここには事前に制約されているが故に事後的に予期せぬ形で展開せざるを得ない社会的な存在としての私という自明性つまり自己認識が、社会によってもたらされ、言語によって解体される自分の自明性つまり当為性の裂け目を縫い合わせようとする行為によって生み出されている。人は常に社会において、他者との関係の中で、自分を問い、自分を新たに認識し続けなければならない存在として、あり続けざるを得ない。そして、自分を新たに認識し続けることにおいて、人は、過剰に、他者に関わり、生成的に社会をつくろうとせざるを得ない。なぜなら、人は他者と

の関係においてこそ常に自らの自明性の裂け目を繕いつつ、次の裂け目を生み出さざるを得ず、その裂け目を繕うためにこそ他者を必要とし、そこに新しい自己認識が生まれ、かつ他者をも変容させていくという生成的な循環が形成されざるを得ないからである。事前性に制約された事後性と過剰な達成の循環、これが社会に生きる私たちの存在の形であるといつてよい。

社会の中で他者との関係において自分を問い、その関係を変容させ続けること、これこそが制度の自明性すなわち当為性を疑いつつ、制度を自覚的かつ生成的に作り上げることにつながっていく。そこで人は制度を作り、運用する「私たち」として、他者との間で自己を立ち上げていく。

これが学習という行為の基本的なあり方である。パネルディスカッションをお願いした3人のパネリストからは、上記のような学習という行為についてそれぞれの立場からのアプローチがあったと受け止めている。報告の内容はそれぞれ異なろうとも、当為としての制度に裂け目をもたらしつつ、制度を生成的につくりだすことで、この社会を我がものとしようとする自己を立ち上げる試み、このことがそれぞれの口から語られたといつてよい。そこで語られたのは、学習の内容ではなく、学習という行為がもたらす制度の破れであり、その行為がつくりだす新たな制度の形であり、それは言い換えれば、言葉という制度のもつ語り口の問題、つまり行為そのものであった。

そして、この語り口こそが基盤と関わってくる。制度の自明性を破綻させ、自ら生成的に構成するための基礎となるべきものは何であるのか。それをここでは基盤と呼びたいと思う。それは、形式であり、形式が決定する内容であり、形式が決定する私たちという存在の形であり、その形が決定する私たちの意識である。この基盤を整え、人々を生涯にわたって、当為としての制度の自明性の沼からすくい上げつつ、彼らが自らの生を十全に生きるための支援を進める試みをし続けること。そして、支援する側が常に彼らとの関係において自ら省察し、変容して、この関係性を組み換え続けること。このことこそが、大学という場に求められる課題なのではないだろうか。

「生涯学習基盤経営」という長いコース名に託された人々の希望のようなもの、そういう曖昧なものを、私はこのように受け止めている。

## **Act, System, and Infrastructure: Consideration Concerning the Rip of Natural World and the Existence of “ I ”**

Atsushi MAKINO <sup>†</sup>

<sup>†</sup> Graduate School of Education, the University of Tokyo

Keyword: Life-long Learning, Act, System, Society, Infrastructure, Language

## **Making of “Life-long Learning Infrastructures” = “Knowledge Infrastructures” in Japan**

Akira NEMOTO <sup>†</sup>

<sup>†</sup> Graduate School of Education, the University of Tokyo

A short essay which describes the author’s opinion about relationships between adult education and libraries in the context of making of the life-long learning infrastructures in Japan.

Keyword: Life-long Learning, Adult Education, Libraries, Occupation Period (1945-1953)

## **Infrastructure and System – Two Types of Invisibility**

Kyo KAGEURA <sup>†</sup>

<sup>†</sup> Graduate School of Education, the University of Tokyo

Keyword: Life-long Learning, Infrastructure Management, Educational Environment, System